黒男ダーティーサージェリー

炭酸ソーダ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪我によって脚に麻痺が残るウマ娘は、秘書さんから噂を聞いた。

曰く「神のようなメス捌きで、あらゆる怪我を治す男」

なお、無免許の模様。

目　次

1枠1番　イレブン・バック ―――― 1

1枠1番　イレブン・バック

待ちに待った新バ戦。
「残り４００！　混戦模様、誰が抜け出してくるのか!?」
脚は溜めてある。大外だけど、ここからなら――
「大外から5番が突っ込んできた！突っ込んで…いや、もう突き抜けている！」
あと３００。２５０、２００…。
「抜けた抜けた！　2バ身、3バ身といったところでゴール！」
「素晴らしい追込でしたねえ。今後の活躍に期待が高まります」
そうだ。今回は勝ったけれど、まだまだ始まったばかり。気を引き締めないと――!?
「…おや？　一人、蹲っています」
「これは…優勝した5番です！どうしたのでしょうか!?」

そこからの記憶はない。目が覚めた時に見せられた新聞が、私の評価を下していた。
『栄光一転、競走能力喪失か』
眼前も展望も、全ては黒く塗りつぶされた。

1枠1番　　イレブン・バック

ウマ娘。
彼女たちは走るために生きている、そう言っても過言ではない。そもそも、人並み外れた馬鹿力を有しているのに、彼女らの第一目標はレースである。それは魂…ウマソウルに刻みこまれた、いわば本能であると考えられる。

しかしながら、人の身体に無理矢理詰め込まれたエネルギーは、しばしば身体を蝕むことになる。全力で走りたい本能がある一方、走れば走るだけ走行能力の喪失の危険性も高まっていくのである。

その危険性があるのに、ウマ達はとにかくレースで走ることをライフワークにする。それはともすれば狂気的であり、まさしく本能的である。

そんな彼女たちが、走れなくなったとしたら。すっぱりと諦められる者もいれば、なんとか足掻こうとする者もいる。彼女は、後者だった。

「…」

一人の少女が歩く。ぴょこん、と頭から突き出た耳が、何者であるかを無言で伝えている。

そこは人気のない道であった。少なくとも近くに人工物はなく、草原にただ砂地の道がまっすぐ伸びているだけの野原である。彼女は、走るわけでもなくとぼとぼと歩いている。

その足取りは、重そうである。それは彼女が俯き加減であるだけでなく、片脚を引き摺りながら歩くからである。

ウマ娘は、耳も鋭い。彼女の耳は、微かに聞こえる波の音をしっかりと捉えている。目的地が近づいていることを察し、少しの緊張を感じていた。

彼女は、元々期待を大いに受けていた。地元では負け知らず、中央トレセンの試験にも余裕を持って合格し、模擬レースでも良い結果を出していた。トレーナーにもすぐにスカウトされ、新バ戦も一番人気と、順調な競走人生をスタートした。

…はずだった。全てはレース後の怪我に帰結する。

「股関節の脱臼です」

医師の診断を受け、彼女のトレーナーが青い顔を見せた。

「脱臼って…治りますよね？」

「脱臼自体は治せます。しかし…」

「しかし…？」
「…坐骨神経が損傷している可能性があります。少なくとも、レースへの参加は勧められません」
　その言葉は正しく、一ヶ月、二ヶ月と経っても、彼女の脚には麻痺が残っていた。
「…」
　色々な医者に診てもらった。しかし返ってくるのは同じ言葉。『日常生活なら…』である。
『どれだけ走れるのかわからない。そもそも、医者に走ることを禁止されている』
　ある日、トレーナーが言った。
『麻痺が治る見込みは薄い。そして、トレセンとはレースを走るウマが集う場所である』
　やんわりと、しかし確実に。
『つまり――』
「契約解除、それと引退勧告、か」
　中央トレセンのレベルは高い。そんなことは子供でも知っている。怪我が重いことも知っている。しかし、それでも――例え地方に行こうとも――レースに出たい。その思いがあったからか、元トレーナーの言葉にはそれほど驚かなかった。
　しかし、今の脚では地方どころかヒト息子とのかけっこにも負けかねない。そんなことを考えていた時、
「あら」
「あっ…たづなさん。こんにちは」
「こんにちは。…何か、ありましたか？」
　心配げな表情のたづなに対し、彼女は自嘲気味に答える。
「トレーナーとの契約を解除しました。あと…近々、退学届も渡しに行くかと思います」
「…そうですか。それは、残念ですね」
「しばらくお世話になりました。それじゃあ…」
　お辞儀をして立ち去ろうとする彼女。しかし、その腕を掴む者がい

た。勿論、たづなである。
「万策尽きたなら…少しだけ、話を聞いていきませんか？」

「…あれか」
彼女が目指していたのは、海に突き出た岬だった。あまり人も近付かない、しかも落とし穴のような深い穴があり、危険な場所として地元では有名な場所である。
緑色の理事長秘書は、彼女にこう告げていた。
曰く「何でも治す、神のような医者がいる」
曰く「その分対価も高く要求される」
曰く「ツギハギのある瓢箪のような人である」
胡散臭いが、語ったのはあの駿川たづなである。もはや縋るようにして、今日彼女はそこを訪れた。
府中からはやや遠く、どうやっても帰るのは門限以降になる。しかしその点は、たづなが上手く調整してくれるとのことだった。

そこには平屋の建物があった。この時代にはなんとも古めかしい様式というか、別荘のような造りである。
建物が近くなると、それまで以上にゆっくりと、ゆっくりと歩く。この辺りには深い縦穴があるという話を気にしているのである。
そんなことをしながら、１０秒、２０秒、３０秒も経っただろうか。建物――家と呼ぶべきか――の玄関と思わしき扉の前に立つ。しばらく息を整えてから、意を決してノブを掴もうとしたその時、
扉が開き、黒い男が現れた。
出で立ちはまさに黒ずくめであり、その白髪と黒髪は綺麗に分かれ、何よりもその顔は――
「ツギハギ…でも、瓢箪じゃない」

「よくわからないが、患者かい？」

「…耳を見る限り、ウマかい」
少女がぴくりと体を揺らす。
「そういう貴方は、医者にしては白くないですね。むしろ真逆です」
建物の中は、しっかりとした医療器具があちこちにあった。それは彼女の緊張を高めることはなく、むしろ医院であることを雄弁に語っており、緊張を和らげるものだった。
「ま、ここにくる時点で大体は察しがつく。走れるようにしろ、ということだね？」
「はい。できますか？」
「診てみないとなんとも」
そう言うや否や、触診を開始する。
「股関節の脱臼に起因。さらに、それによる座骨神経の圧迫、損傷。そうだったね？」
「そんな感じです、たぶん」
ぺたぺたと脚を触りつつ、もう一方の脚も触る。
「怪我をする前から、右が痛かったのでは？」
「多少はありました」
「左も不安だ。無意識の内に、右を庇って走ってしまったのだろう」
触診を終え、レントゲンを撮り終える。
「結論から言えば、日常生活に支障がない程度には戻せるだろう」
「…それじゃあ意味がないんです」
「何、レースが全てではないだろう。甚だ不可思議ではあるが、君たちは力も強いしルックスも良い。そう困ることはないと思うが？」
「それじゃあ！　意味がないんです！」
彼女が、俯きながらも大声を出す。
「頑張ってきたんです！頑張って中央に入って、トレーナーが付いて！ようやくデビューして1着になったと思ったら、これで終わりだっ

て！」
　かつて自分が負かした相手が、順調にレースを勝ち進んでいく。対して自分はトレーナーにすら見放され、学園から出て行くことを望まれている。引き摺る脚を見るたびに、医者への疑念、トレーナーへの絶望、ライバルへの羨望、さらに己自身の無力を感じ続けていた。
「多少なりともレースを走っていたなら、諦めもついたかもしれません。でも、たった1レースなんです！一度だけ走って、一度だけ勝利の喜びを味わせておいて、もう走るな？冗談じゃない！」
「そこまで言うなら、覚悟を見せてもらう」
「…覚悟？」
　訝しむような声色とは裏腹に、彼女は微かな違いを感じていた。彼女を診察してきた医者は、少なくとも患者に覚悟を求めることはなかったからである。
「手術料その他諸々で、これだけ頂こう」
　男は、ばっと両手を広げてみせた。
「…１００万円ですか？　それとも、１０００万ですか？」
「あまり驚かないのかね」
「地方だろうとレースさえ走れれば、そのくらいは稼いでみせます。それで、どちらですか？」
　ぶっきらぼうに言う少女に対し、男は口角を釣り上げながら告げた。
「どちらでもない。１０億円を請求する」
「じゅ、１０億!?　そんなお金どうやって!?」
　待ってましたと言わんばかりに、男はさらににやりとしたり顔を浮かべる。
「１０億なんて、中央の、それもほんの一握りのウマ娘にしか！」
「だから１０億だ。それは、おまえさんが自分の脚に付ける価値だ。トップを取ろうという気迫もないのに、レースに復帰するのかい」
「…」
　少女がちらりと見るのは、自分の利き脚、右の脚。不随意にぴくりと動くような、とてもレースには使えない脚。

「さて、どうする？」
「…」
　額を汗が伝う。もちろん、彼女は自分の実力に自信を持っていた。少なくとも、生まれてから新バ戦までは負けたことがない。しかし、１０億である。そこでふと、彼女は違和感を抱いた。
「医者なんですよね？」
「そうだとも」
「１０億も請求したら、法律違反か何かでは？」
「無免許なんでねえ。このところ、また医師連盟がうるさくなってきたがね」
「む、無免許…」
　彼女は呆然とした。しかし、堂々とモグリを名乗るその顔は、微塵も動じた気配がない。
「…本当に。本当に、また中央で走れますか？」
「それはお前さん次第だ。治ろうという気がない人間は、どうやったって治らないもんさ」

　夜の東京・府中。
　傷心のウマ娘が寮に帰っていない。ひょっとして…といった具合に、トレセン学園は大騒動になっていた。
「危急ッ！　たづな、状況は？」
「警察にも動いてもらっています。しかし、目撃情報もあまり芳しくはないようです」
「…迂闊ッ！　心理的なケアを怠った！」
　デスクに拳を叩きつけるのは、学園理事長の秋川やよいである。その音に驚いてか、『少女』の元トレーナーが肩を震わせた。

「それで、トレーナーさん。最後に会った時、彼女に何か変わった様子は？」
　理事長秘書、たづなが問う。
「憑き物が落ちたように、とても晴れやかな顔でして…。失踪するなんて思いもしませんでした」
「軽率ッ！　われわ…彼女達は走ることが本懐！それを取り上げるとなれば、慎重になることが肝要ッ！」
「そもそも、引退の是非は自らが判断するべきこと。トレーナー側から促すというのは頂けません」
　重役二人に詰られつつも、トレーナーは応える。
「しかし…医学的観点から見て、彼女が走ることは不可能でした。だというのに、レースに向かおうとする姿はあまりにも痛々しいものが…」
　不意に、理事長室に着信音が鳴り響く。と、人並み外れた速度で受話器が取られた。
「確認ッ！　見つかったのか!?」
『はい！　なのですが…』
　電話の相手、内線を繋ぐ学園の事務が言いよどむ。
「疑問ッ！　何か問題が？」
『それがですね、来学の許可を求めていまして…』
「む？　彼女がか？」
『いえ、彼女を保護したという人物が…』
「確認ッ！　誰なのだ？」
『それが…
　　ブラック・ジャックと名乗っています』
「ブラック・ジャックだと？」
　やよいは目を開いて言葉を発し、それを聞いたたづなは僅かな笑みを浮かべる。
「許可ッ！　ここへ案内せよ！…ああ、一応入校許可書を書いて貰うように。署名も忘れずにな！」

「貴女が理事長か？」
男――ブラック・ジャックは、怪訝な目でやよいを見ている。
「肯定ッ！　そして君がブラック・ジャックだな」
女、秋川やよいも同じ目をしている。
（理事長…些か小さいが）
（黒い…そして、顔面の継ぎ接ぎ…。なるほど）
前者は外見から率直に驚き、後者は自分の知識と外見を照らし合わせていた。
「それで、彼女は？」
「涙目の友人に囲まれていましたよ。…ところで、貴女は私をご存知のようで」
「うむ。…たづな」
やよいは発言を促し、たづなは首肯する。電話からの僅かな時間で用意した資料を手に、彼女は口を開く。
「ブラック・ジャック。本名は間黒男。闇医者として世界各地に赴き、患者に法外な手術料を要求する一方でその技術は極めて高く、依頼が絶える事はない…とのことです」
「うむ、ご苦労！　そんな男が、生徒に何用…とは聞くまでもない、か」
「よくご存知で」
肩を竦めるブラックジャック。
「で？　当学園、いや、私には何用か？」
「話が早い。…ウマ娘用の設備が揃った手術室を借り受けたい」
「…了承ッ！　メジロ病院に話を通しておこう！」
「ありがたい。では」
ブラックジャックはすっと立ち上がり、そのまま部屋を出ていこうとするも、元トレーナーが慌てて立ち上がる。
「ちょっと待ってください！　理事長、闇医者ですよ!?　それも世界有数の！　そんな輩に、生徒の手術を任せるのですか!?」
「無論ッ！些かがめついところがあるが、彼は危険人物ではない！…と、思う」

「しかし…たづなさん！」
「いいんじゃないですか？本人が受けるつもりならですけれど。ねえ？」
「もちろん。契約書はしっかり書いてもらうさ」
おそらく、最も正論なのは元トレーナーである。しかしこの学園においては、理事長が黒と言えば黒なのである。
そうこうしているうちに、闇医者は部屋を去っていった。
「…認めません！こんなこと、認めませんよ！」
語尾を荒げながら、元トレーナーも去っていく。
「…たづな、これで良いのだな？」
「技術については、どこぞの鍼灸師とは比肩になりません。お金については…まあ、出世払いなので頑張ってもらいましょう」
「雑ッ！　それでいいのか？」
「あの人は、払えない額は要求しないでしょう。彼女の能力を見据えているのだと思います」
「昔取った杵柄というものか。彼は気づいていないようだったが」
「…まあ、そんなこともありましたね」
たづなはちらりと足元を見て、すぐに視線を戻す。
「それに、医師連盟は彼をかなりマークしているようです。羽休めの時期というのも必要なのではないでしょうか？」
「震撼ッ！　たづなは時々恐ろしい！」
「嫌ですね。私はただただウマ娘の幸せを考えているだけですのに」

都内某所・メジロ病院。
その名の通り、巨大グループであるメジロ系の病院である。メジロ家がウマ娘の家系であるということもあり、ウマ娘の扱いには慣れているとされる。
「おむかえでごんす」
病院入口で待っていた二人を、鼻の大きな病院関係者が呼びにきた。

「さて、心構えはできたかね？」
「１０億…１０億…」
　契約書にサインした後も、少女はぶつぶつと呪文のように繰り返し続けている。
「おむかえでごんす」
「うるさい！わかってるよ！」
「ごんす…」
　苛立つ少女に怒鳴られ、関係者がすごすごときた道を戻っていく。
「行ったら治る…でも１０億…。行くは恥、行かざるは一生の恥…」
「はーい、つべこべ言わずに行きますよー」
　メジロだけあって、看護師にも元（現？）・ウマ娘が在籍している。彼女らに押され引かれて、ようやく少女は進み出した。

「１０億…１０億…」
「はーい麻酔いきますよー」
「１０お…もう食べられないよお…」
　患者が眠りについたところで、外科医たちは気を引き締める。
「メジロ家の主治医です。今日は勉強をさせていただきます」
「こちらこそ、急に押しかけてすまんね。…さて、そろそろ始めようか」

　神のようなメス捌きで、手術はスムーズに終わった。
「すばらしい。ブラックジャック、噂に違わない腕でした」
「お前さんの注射技術もなかなかだった。あれなら痛みも少ないだろう」
「お嬢様方に暴れられては命に関わりますので」
　病院入口へと向かいながら和気あいあいと話しているところへ、ガヤガヤという人々の声が聞こえてくる。
「深夜だというのに騒がしいですな」

「…いや、これは警察のサイレンです。何か事件でもあったのでしょうか」
と、病院玄関を出たところで警察官がぞろぞろとやってきた。ブラックジャックを見つけると、彼らは真っ直ぐに向かっていく。
「間黒男！　医師法違反、その他もろもろの容疑で逮捕状が出ている！」
あっという間に取り囲まれ、慣れた様子でバンザイをするブラックジャック。
「…あなた方、ここが病院、それもメジロのそれと知ってのご判断か？」
「メジロがなんぼのもんじゃい！ちゅーかおんしら、無免許医に執刀させとるやろがい！　一緒にしょっ引いたろか！」
どこ出身か分からない警察官が挑発するも、別の警察官が羽交い締めにする。
「メジロはやばいって！そもそも逮捕状ないし！」
ブラックジャックを確保すると、大勢いた警察官はそそくさと立ち去っていった。

もう食べられないよお。
ヒョウタンツギはもう食べ飽きたよお。
まだあるのお？
いやもう…
「いらないって！」
「起床！　長い睡眠だったな！」
彼女が目を開けると、そこは知らない天井だった。しかし、自分を覗き込む幼い顔は知っていた。
「えっ…と、理事長さん、ですよね？」
「私もいますよ」

たづなもひょこっと顔を見せる。
「えっ。ここはどこで、何がどうなっているのでしょうか」
「ここはメジロ病院で、貴女は手術を受けました。その結果、無免許の手術をしたとして先生が逮捕されて今に至ります」
「へえ。逮捕ー。ん、逮捕？」
「肯定ッ！なかなかまずいことになったぞ！」
「いや、どっどっどっどうするんですか。いや、これは手術代がチャラになるとかそういう――」
「はいそこまで。一旦落ち着きましょう」
お茶の入ったコップが差し出され、少女は一息に飲み干した。
「はぁ。…そもそも、なぜお二方はここに？」
「うむ！　君の手術には我々も一枚噛んでいる！彼に対しても、それなりの負い目というものがあるのだ！」
「そもそも、貴女の元トレーナーさんが医師連盟の関係者でして…。手術の話を聞いて、どうやら警察を動かしたみたいなんです」
「そこでだ！彼を上手いこと解放させ、さらに君にとっても悪い話ではないプランがある！」
ごくり、と喉が鳴る。誰のものかは言うまでもない。
「彼はトレセン学園所属で、君のトレーナーだった！そしてトレーナーの業務範囲として、君に治療行為を行った！というテイだ！」
「より正確には、トレセン学園保健室長兼ウマ娘担当トレーナーだった、というテイですね」
職権乱用どころか、捏造行為である。しかし、トレセン学園では理事長が以下略。
「いや、えっ。あの、大丈夫なんですか？」
「白か黒かで言えば、真っ黒だ！」
やよいが扇子をばっと開くと、そこには「漆黒ッ！」という文字が。
「そ、それで。私は何をやらされるので？」
「簡単なことです。記者会見で、『マッサージの延長上の行為』とでも言って下されば」
「マッサージ（外科的行為）だな！」

「えっえっ」
「あら、理事長。そろそろお時間が」
わざとらしく言う秘書に対して、
「そうか！そんな時間か！」
わざとらしく答える理事長である。
「そういうことで、お願いしますね」
そう言い残して、去っていった。
「え。え。あの…その…」

「ということでして。あ、これ差し入れです」
留置場のアクリル板を挟んで座るのは、緑の秘書と黒い闇医者である。
「いいんですか？　後ろに刑務官がいるのにそんな話をして」
「いいんですよ。…よろしくお願いしますね？」
たづなに声をかけられた刑務官は、帽子を取って一礼する。隠れていた二つの耳が露わになった。
「怖い怖い。なるほど、最初から私に手術をさせて医師連盟を挑発するつもりだったと。逮捕によって私の退路をなくしたわけだ。ただ一方、トレセン学園を除いて」
「でも、逮捕されるほど目をつけられていたのは、元々の先生自身の行動のせいですよ？」
「よく言う。そもそも、私はいつ学園に所属したことになるのです？」
「それはまあ…こんな感じで」
たづなが取り出したのは、昨日の入校許可証である。一枚紙をめくると、そこにはカーボン紙、その下には契約書が挟まっている。
「ちゃんとサインがありますから。合意がなければ契約は成立しません。でも、両者が合意してしまえば成立するんですよね。今先生がサ

インを認めてしまえば、事後的に契約成立です」
「…いいんですか？　学園が医師連盟と対立するということですがね」
「知っていますか？　ヒトはウマ娘には勝てないんですよ」
　にこりと、悪魔にも天使にも見える笑顔が生まれた。
「わからない。そこまでして私を呼び込むのはなぜです？」
「…ウマ娘という生物は、走ることをやめられません。たとえ怪我をしても、治った後にはまた走る。食べることも大好きで、ふとしたことで寝不足に陥り、しかも肌荒れにも悩まされる。どうしようもない生物なんです」
　懐かしむかのように語る。
「これまでも、これからも。怪我や病気というものは、ウマから笑顔を奪い去ります。でも、貴方なら。きっとみんなの笑顔を取り戻してくれる」
　頭に手をやると、たづなは帽子を脱ぎさった。
「既に一人、救われていますから」

　かつて、一人のウマ娘がいた。
　彼女は怪我をし、さらに病毒に身体を蝕まれた。
　手術は成功したが、しばらくの安静を余儀なくされた。
　しかし、総じてウマとは腹を減らす生き物である。普段食堂でたらふく食べている身体は、まだかまだかと食を求める。
　しかし、男の医者の小さな医院であるし、米くらいしかない。そもそも調理にかける時間もない。しかたなく、医者は自分のストックを与えた。山ほどあったストックも、みるみるうちになくなっていった。

「いつか返します」
腹の虫を鳴らしながら、赤面しながら、彼女はそう言っていた。
つまり、どういうことかと言えば。
「ボンカレーは、どう作っても美味いのだ」
留置場の格子から月を眺めながら、差し入れを食べる男がいた。